

樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書 LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (初版) について

[論文]

加藤 道夫*、寺内 朋子**、青山 (高瀬) 道乃***

On LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (1^{ère} édition), originally owned by YOSHIDA Tetsuro

KATO Michio, TERAUCHI Tomoko, AOYAMA TAKASE Michino

This document: LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (1^{ère} édition), was given to HIGUCHI Kiyoshi by YOSHIDA Tetsuro. It is valuable from the following points. 1) The 1st edition has several differences from both the original texts in *L'esprit nouveau* and the book; *Vers une architecture* currently in circulation. It bridges these differences. 2) This copy is rare for its publication period is limited. 3) This copy had been originally owned by YOSHIDA Tetsuro.

キーワード：樋口清、吉田鉄郎、ル・コルビュジエ、『建築へ』、『新精神』誌

HIGUCHI Kiyoshi, YOSHIDA Tetsuro, Le Corbusier, *Toward a New Architecture*, *L'esprit nouveau*

1. はじめに

本稿は、令和4(2022)年に贈与契約を締結した「樋口清旧蔵吉田鉄郎蔵書 LE CORBUSIER-SAUGNIER, *Vers une architecture* (初版) (以下「樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)」)、ただし書籍としての記述においては「*Vers une architecture* (初版)」)について、同資料の外形的特性と来歴に加えてその内容¹を紹介し、その資料的価値を詳らかにすることを目的とする。

2. 樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)の外形的特性

同資料は、樋口清(1918–2018)が吉田鉄郎(1894–1956)から譲られた書籍である。同資料の外形的特性(体裁)は以下のものである。皮表紙、サイズは243mm×169mm×23mm(後年の皮製本により、出版当時より少し大きくなっている)。

次にその構成順は以下のものである。1) 表題と献辞のみが印刷された見返し。2) 著者、表題、出版社が印刷された中表紙。3) ローマ数字によるページ番号が付された(Ⅶ～Ⅺに相当、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺのみにページ付あり)論旨概要[ARGUMENT](以下、「論旨概要」)。4) アラビア数字のページ番号が付された本文230ページ。5) 直後の印刷所を記したページ(裏白)。

そして中表紙には、著者名：ル・コルビュジエーソーニエ[Le Corbusier-Saugnier]、表題：Vers une architecture、出版社：クレ社[Les Éditions G. Crès et C^{ie}]が記載されて

いる(図1)。そして、書名が印刷された見返し上部には「アメデ・オザンファンへ[A Amédée Ozenfant]」(以下「オザンファンへの献辞」)が刻印されている(図2)。

ただし出版当時にはあったはずの表紙が損失しており、その状態で皮表紙により再製本されている。また、同資料には平成17年4月2日付けの製本業者から樋口にあてた再製本に関する手紙が挟まれている。この手紙から判断して、再製本は樋口の依頼によってなされたと考えられる。

その他、本資料のページの余白部分には鉛筆による仏語辞典からの写しとみられる書き込みが複数見られる。これについて遺族に尋ね、「樋口の筆跡である」という証言を得た。邦訳に際して辞書に当たった結果を書き留めたものと考えられる。

3. 樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)の来歴

次に同資料の来歴について記す²。同資料が吉田から樋口へ渡った時期については二種の記述が存在する。まず、樋口が邦訳した『建築へ』(中央公論美術出版、2003)の「あと書き」には、「戦後、1940年代の末、私が鹿島建設の建築設計部に入ったとき、そこに吉田さんは顧問としておいでになり、私たちがベレヤエスバリなど建築の話をしていて、この本を下さったのである」³との記載がある。しかし、樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版)の冒頭のページ上部に「病床にあ

*国立近現代建築資料館 元主任建築資料調査官、工学博士 **国立近現代建築資料館 元研究補佐員、修士(工学)

***国立近現代建築資料館 研究補佐員、早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 博士後期課程

る吉田鉄郎先生よりいただく」との樋口による書き込みがある(図3)。これが事実であるとする、邦訳の「あと書き」にある吉田による建築の話は、同資料を用いたものであるものの、叢書が実際に樋口の手に渡ったのは、吉田が病床にいる時期に下ることになる。

残念ながら、吉田がどのような経緯でこの樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版) を入手したかは不明である。吉田が欧米へ出張(フランス、ドイツ、スウェーデン、カナダ、アメリカを来訪)したのは昭和6(1931)年から7(1932)年である。後述するように、この時点で *Vers une architecture* はすでに第3版が刊行されており、通常の書店で初版本を購入することはかなわなかったはずである。したがって、吉田が樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版) を手に入れたのは別の機会だったと推察される。

次に同資料の旧蔵者である樋口について簡単に略歴を紹介しておこう。同氏は、1941年に東京工業大学建築学科を卒業、1943年に東京帝国大学文学部フランス文学科を卒業、第2次世界大戦後には鹿島建設設計部で勤務、工学院大学建築学科を経て、1962年に東京大学教養学部図学教室に助教授として赴任した。その後、教授に昇進し、1979年に東京大学を退官。退官後は東京理科大学で教鞭をとった。彼は生涯にわたって、フランク・ロイド・ライトなどの多くの書籍を翻訳する傍ら、北欧など海外の建築の紹介に努めた。ル・コルビュジェの邦訳についていえば、生田勉との共訳である『伽藍が白かったとき』(岩波書店, 1957)を始めとして、『ユルバニスム』(鹿島出版会, 1967)、『建築へ』(中央公論美術出版, 2003)がある。同翻訳の底本となったのが樋口清旧蔵 *Vers une architecture* (初版) である。

4. *Vers une architecture* (初版) の意義

Vers une architecture (初版) の意義は何と云ってもその希少性にある。出版は1923年秋、おそらく1925年までに改定第2版が刊行されたため⁴、同書が流通していた時期に限られるからである。しかし、その資料的価値は希少な初版本であることに留まらない。伊従勉(1987)は次のように記している。「多くの論者は、初版を知らずに、あるいは初版を確認せずに、第二版の姿と内容を初版『建築書』と同一と見做している。そうではない。ル・コルビュジェ著の『建築』書は、第二版で初めて誕生したのである」(p. 204)⁵。

そこで本章では、同書初版に内在する意義を以下の5つの観点から明らかにする。1) *Vers une architecture* (初版) における構成の変化、2) *Vers une architecture* (初版) の著者名、3) *Vers une architecture* (初版) の改訂、4)

Vers une architecture (初版) の出版の経緯、5) *Vers une architecture* (初版) の邦訳。

4.1. *Vers une architecture* (初版) における構成の変化

Vers une architecture (初版) は『L'esprit nouveau [新精神]』(以下『新精神』誌)の第1号(1920年10月)から第16号(1922年3月)に掲載されたル・コルビュジェ—ソーニエによる論考13編がベースになっている。*Vers une architecture* (初版) における『新精神』誌の論考群からの変化は、以下の3つに整理できる。1) 掲載順序の変更、2) 「建築か、革命か」の追加、3) 論旨概要の追加。

4.1.1. 掲載順序の変更

『新精神』誌に掲載された論考群と *Vers une architecture* (初版) を比較するとその掲載順が変わっている。まず、『新精神』誌では8番目の論考である「工学技師の美学、建築」が、*Vers une architecture* (初版) では冒頭に据えられている。工学技師による建物を建築として捉え直して、そこに内在する美学を顕在化するという、ル・コルビュジェの意図を前景化しているという点で重要な変更といえる。補足するならば、他の論考は9番目の論考である「量産住宅」を除いて『新精神』誌における掲載順に並んでいる。そして「量産住宅」が、書籍化にあたって末尾に追加された最終章「建築か、革命か」の直前に移された。

4.1.2. 「建築か、革命か」の追加

「量産住宅」の移動は、「建築か、革命か」の追加と連動している。『新精神』誌における「量産住宅」の末尾の文は「建築か、革命か」という選択肢の提示で終わっており、その解答が保留されたままになっていた。末尾に追加された「建築か、革命か」の章は、その解答に当たる。そして、規格化の推進に基づいて建築することで「(建築によって)革命は避けることができる」と結ばれる。

「量産住宅」と「建築か、革命か」という二つの章が、本書の末尾に配置されることは、それらが合わさって本書の結論となるだけにとどまらない。それらは、新時代の兆候を要約する「工学技師の美学、建築」の冒頭への移動と呼応関係にあり、それらだけで兆候——選択肢の提示——解答という完結した文脈を構成する。その結果、この文脈で他の論考を読み直すことが可能になった。

つまり、*Vers une architecture* (初版) は、「工学技師の美学、建築」を出発点とし、「建築か、革命か」という選択肢の提示を経て、「(建築によって)革命は避けることが

できる」という解答に至るといふ文脈の下に再編することで、『新精神』誌に掲載された論考群に体系的な再解釈を促すという意義を持っている。

4.1.3. 論旨概要の追加

Vers une architecture (初版) では各章の内容をまとめた論旨概要が冒頭に追加され、それらが各章の冒頭にも反復された。そこでは「住宅は住むための機械」が「見えない目 I 商船」の項ではなく、「見えない目 II 飛行機」の項に記載されている。対して、本文では「見えない目 I 商船」の章に記載され、「見えない目 II 飛行機」には記載されていない。

しかも「住む」に相当するフランス語が異なっている。論旨概要における「住む」は「habiter」と記されている。対して、本文では『新精神』誌から *Vers une architecture* (初版) に至るまで、「住む」に相当するフランス語は「demeurer」が用いられている。

続いて *Vers une architecture* の第2版以降を見る。ここでは「住宅は住むための機械」という記載が、「見えない目 I 商船」本文と論旨概要の「見えない目 II 飛行機」の項に記されており、「住む」に相当するフランス語は一貫して「habiter」が用いられている。

以上の変化を整理すると以下ようになる。1) 『新精神』誌では「住宅は住むための機械」における「住む」に相当するフランス語は「demeurer」が使用されていた。2) 「住む」に相当するフランス語「habiter」が使用されるのは、*Vers une architecture* (初版) の刊行の際に付け加えられた論旨概要が最初である。3) 論旨概要における「habiter」を用いた「住むための機械」という記載は「見えない目 II 飛行機」の項に限られる。4) *Vers une architecture* (初版) まで、本文では「住む」に相当するフランス語は「demeurer」が使用され、「habiter」は使用されない。

要約するなら、「住むための機械」[une machine à demeurer] から「住むための機械」[une machine à habiter] への変化は、「見えない目 I 商船」内で完結しない。*Vers une architecture* (初版) に挿入された論旨概要の「見えない目 II 飛行機」の項を経由した変化である。そして、*Vers une architecture* (第2版) 以降では、本文においても論旨概要においても「住むための機械」に一貫して「habiter」が使用されるにいたった。

以上の事実は、ル・コルビュジエの「住むための機械」に関するこれまでの理解の変容を促す。その変容を要約すると以下ようになる。

1) *Vers une architecture* (初版) における「住むための

機械」[une machine à habiter] の唐突な挿入は、ル・コルビュジエが(「商船」にではなく)「飛行機」に嗅ぎ取った過渡的な潜在的兆候の「しるし」の反映である。

2) その後、第2版刊行までに「しるし」が現勢化され、商船においても「住むための機械」[une machine à demeurer] から「住むための機械」[une machine à habiter] への転移を促した。

4.2. *Vers une architecture* の著者名

同書初版の著者名は『新精神』誌に掲載された論考群と同じく「ル・コルビュジエーソーニエ」[Le Corbusier-Saugnier] である。「ル・コルビュジエ」[Le Corbusier] はシャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ [Charles-Édouard Jeanneret]、ソーニエ [Saugnier] はアメデ・オザンファン [Amédée Ozenfant] のペンネームである(以下、著者名は日本語のみで表記)。オザンファンの提案でそれぞれのペンネームが考案され、同誌に建築評論を書く際にはそれらを合わせた「ル・コルビュジエーソーニエ」が用いられた。補足するなら、「造形芸術について」(1号, 1920年10月)に始まる美術に関する論考群は、後に近代絵画 [La peinture moderne] (1925) として書籍化される論考群も含めて、一貫して「オザンファン」と「ジャンヌレ」の連名で発表された。絵画作品には1928年頃まで「ジャンヌレ」と署名している。さらに付け加えるなら、後にユルバニスム [Urbanisme]、今日の装飾芸術 [L'art décoratif d'aujourd'hui] と題して書籍化されることになる論考群は、前者の冒頭に配された「ロバの道、人間の道」(同誌17号, 1922年6月)が「ル・コルビュジエーソーニエ」であることを除いて、一貫して「ル・コルビュジエ」単著で発表されている。要約するなら、ル・コルビュジエことジャンヌレは、建築家と建築評論家としてはペンネームの「ル・コルビュジエ」を用い、画家と美術評論家としては本名の「ジャンヌレ」を使い分けていた。

しかし、*Vers une architecture* (初版) 刊行に際して同書の帰属性にかかわる重要な変化が生じた。アメデ・オザンファンへの献辞が挿入されたのである。その結果、「ル・コルビュジエーソーニエ」がオザンファンから切り離され、オザンファンとは独立した人格であると誤解されるように仕組まれた可能性がある(伊従, 1997, p. 202)。すなわち、同書(初版)は、ル・コルビュジエーソーニエ著の『新精神』誌における論考群からル・コルビュジエ単著である *Vers une architecture* (第2版) へ至る過渡的状态を示す重要なエヴィデンスである。

4.3. *Vers une architecture* (初版) 出版の経緯

Vers une architecture (初版) 出版の経緯については、伊従 (1997) に詳しく記されている。

そこで伊従は同書について、1) 1923年秋の出版であること、2) 著者は「ル・コルビュジエーソニエ (ママ)」であったことに加えて、3) 「レスプリ・ヌヴォー (ママ)」叢書の著作1号と考えられているが、出版当時、叢書はまだ成立していないことを指摘している。その上で、4) 「同書がジャンヌレの (以降の) 著作のモデルとなり、パリでの執筆活動の出発点になった」と指摘している。

出版時期に関連して補足するなら、同書の新刊広告 [VIENT DE PARAITRE] が『新精神』誌の第18号 (1923年11月) から第22号 (1924年6月) にかけて連続して掲載されている。

4.4. *Vers une architecture* の改訂

Vers une architecture (初版) はいくつかの変更が加えられ、ル・コルビュジエ単著で刊行されることになる。その際に「第2版に際しての序」が加えられた。それに伴うル・コルビュジエとオザンファンとのやり取りの経緯を要約すると以下ようになる。まず、ル・コルビュジエとジャンヌレが *Vers une architecture* の単著化をオザンファンに要求 (1924年8月8日の手紙) (Ducros, 2001, p. 93)。オザンファンが同書の単著化を了承 (1924年8月13日の手紙) (同上)。しかし、第2版出版の過程で著者の特定にかかわる重大な変更が生じた。初版に記載されていたオザンファンへの献辞の削除である。この件についてのオザンファンからの問い合わせに対し、ル・コルビュジエは出版担当者からの手紙 (1926年3月11日) のコピーを添えて、出版社による手違いで自分の指示によるものではないと説明している (1926年3月12日の手紙)⁶。

その後、第2版に図版を追加し、若干の本文の修正を加えた改訂第3版が1928年に刊行された。その冒頭には「第2版に際しての序」に代わって1928年1月1日付の「時候3版に際して」が加えられた。その後、クレス社の倒産による絶版を挟んで1958年に復刻再版された (3回目の改訂にあたる)。

4.5. *Vers une architecture* の邦訳

Vers une architecture (初版) の抄訳を初めて公表したのは、中村順平である。彼は1920年から1923年にかけての渡欧時に入手した同書の冒頭部分にあたる「論旨概要」の一部を「仏蘭西現代都市研究について」(『建築思潮』1924) に紹介している⁷。その後、様々な人物に

より複数の抄訳が試みられた。蔵田周忠がそれらをまとめたリストを『国際建築』の1929年8月号に発表している (佐々木, 2011, p. 228)。そして、それらの抄訳群とは独立して、宮崎謙三訳による同書の全訳『ル・コルビュジエ 建築芸術へ』(構成社) が1929年に刊行された (図4)。宮崎が底本としたのは、今井兼次が丸善書店で購入し、友人の小池新二に貸した *Vers une architecture* (初版) である。ただし、邦訳刊行に際して著者名が「ル・コルビュジエーソニエ (ママ)」から「ル・コルビュジエ」に改められた (佐々木, 2000, pp. 155-157)⁸。

訳者序文 (原文の旧字体を新字体に変更) によると、邦訳は1928年春に完了していたようだ。また、独訳を参考にしていると記されている。「訳は原著によったものだが、多少独逸訳を参照した」(原文の旧字体を新字体に変更)。加えて、挿図について下記のように記している。「挿図は鮮明なる理由から独逸訳のものを複写した」(宮崎訳, 1929, p. 1)。参照したと考えられる独訳版も仏語版 (初版) を底本としている⁹。補足するなら、同翻訳は Frederic Etchells による英訳 *Towards a New Architecture* (John Rodker Publisher, London, 1931) に先行する。

続いて吉阪隆正訳の『建築をめざして』が1967年に刊行された。いずれも第3版で初めて付け加えられた「時候」を含んでいることから、いずれも第3版以降の改訂版を底本にしていることがわかる¹⁰。

そして、樋口清による邦訳が2003年に刊行されるに至る。同翻訳の初版は、仏語版初版当時の表紙を復元し、日本語による著者名と表題の表記は、透明なカヴァーに印刷することで透明なカヴァーを外すと当初の表紙がどのようなものであったかがわかるような工夫がされている¹¹。また、ページ割も可能な限り *Vers une architecture* (初版) を保存するようになっている。具体的には本文のページ数が *Vers une architecture* (初版) と同じ230ページであり、*Vers une architecture* (初版) と1対1の対応関係が可能な限り保存されている¹²。

5. 結び

本資料がもたらす価値は二つに分類できる。第1は本資料の書籍としての内容にかかわる。すなわち、*Vers une architecture* (初版) は、ル・コルビュジエーソニエの著者名で『新精神』誌に発表された一連の建築に関する論考と *Vers une architecture* (第2版) 以降のル・コルビュジエ単著の改訂版の間であって、その間を埋めるミッシング・リンクを埋める。したがって、同書を介在させてそれらの間にある差異を読み解くなら、その間に潜在するル・コルビュジエの建築観の変化の理解を

深めることが期待できる。

本資料のもう一つの価値は、資料の来歴、すなわち同資料が吉田鉄郎の蔵書であったことに由来する。吉田がオーギュスト・ペレを信奉していたことはよく知られている。しかし、吉田が希少な *Vers une architecture* (初版) を所有していたこと、さらに晩年の吉田が同書を用いて鹿島建設の若い設計部社員にむけて話をしたという事実にもとづくル・コルビュジエへの関心は、これまでの吉田研究においてあまり触れられてこなかった。同資料によって、たとえば逓信省における吉田の規格化の推進にル・コルビュジエとの関係という新たな視座を加えることが可能となる。

さらにいえば、国立近現代建築資料館は、本資料以外に吉田鉄郎に関する資料群を所蔵している。両者を連携させることで、より広範な視点から吉田の建築を検証することができるだろう。本資料が吉田研究に新たなエヴィデンスを提供することで吉田研究の進展を促し、その成果によって我が国の近現代建築の理解が進むことを期待したい。

注

- 1 *Vers une architecture* (初版) については以下の先行研究がある。1) 伊従 (1997)、2) Ducros (2001)、3) 加藤 (2012)。本稿では必要に応じてこれらを参照している。本稿の執筆にあたっては、可能な限りエヴィデンスを示すように心がけた。
- 2 加藤は、樋口による邦訳『建築へ』のあとがきの記載から樋口清が *Vers une architecture* (初版) を所有していると推察していた。しかし、確認できないまま時が過ぎた。その後の国立近現代建築資料館における打診の経緯を要約すると以下ようになる。2019–2020年に開催した「吉田鉄郎の近代 モダニズムと伝統の架け橋」展において、樋口清先生と近い橋本久道氏に樋口清訳『建築へ』の底本となった *Vers une architecture* (初版) の現況について、お尋ねした。その後、当館の元主任建築資料調査官の山名善之の連絡がきっかけとなり、2022年5月になってご遺族が同書を当館へ預けたいという意思を示されたという連絡が橋本氏からあった。その際、館内で同書の扱いに向けた検討を開始すること、その結果を運営委員会等にはかり、寄贈資料として受け入れる可能性を検討する旨を伝えた。これを受けて、2022年5月30日にご遺族が橋本氏とともに当館に同書を持参された。
- 3 同書の「あと書き」に記された「ペレ」とはフランスの建築家オーギュスト・ペレ (1874–1954) であり、「エストベリ」とはスウェーデンの建築家ラグナール・エストベリ (1866–1945) である。いずれも吉田が昭和6 (1931) 年から昭和7 (1932) 年にかけての渡欧時に直接その作品をみた建築家であり、吉田の話は渡欧における実体験を踏まえたものであったと思われる。ペレは吉田がとりわけ心酔した建築家であり、ペレの特集号である *L'ARCHITECTURE D'AUJOURD'HUI* (no. 1, Novembre 1930) などを通じて、ペレの作品を参照していた。代表作に《フランクリン街のアパート》(1903)《ランシーの教会》(1923) などがある。エストベリの代表作は何といても《ストックホルム市庁舎》(1909–1923) であろう。
- 4 第2版の出版時期を正確に特定することは難しい。Lucan (1987) は (おそらく同書に付された「第2版への序」に記された1924年11月の日付をもとに) 1924年としている (p. 483)。吉阪訳の『建築をめざして』の扉裏に記されたcopyrightも1924出版の書籍の存在を示唆している。しかし、その正確な出版時期は1925年まで下る可能性が高い。詳細は、加藤 (2012, pp. 151–153) を参照。付け加えるなら、伊従 (1987) は『現代建築年鑑』(1926) の「新精神館が建設されている間に『建築書』が再版され……」(p. 210) という記述に基づき、『新精神館』の1925年の7月10日の開館に向けて出版されたと記している。
- 5 それらの差異については、すでに加藤 (2012) が多くを指摘している (pp. 53–57)。関連して、同書において第3版で挿入されたと記した (p. 57) 「アクロポリスの遠望スケッチ」は、第2版においてすでに挿入されていた (p. 186)。この場を借りて訂正する。
- 6 伊従 (1987, p. 210)。加藤 (2012, pp. 50–52)。1926年3月12日付のオザンファンへの手紙は下記に掲載されている (Jornod, 2005, pp. 1028–29)。オザンファンへの献辞は第3版で復活する。
- 7 佐々木 (2000) によれば、日本でル・コルビュジエを始めて紹介したのは薬師寺主計である。彼は1921年から1923年まで渡欧、帰国後の『建築世界』(1923年8月号) にル・コルビュジエとの会見を寄稿している。
- 8 同翻訳書の近刊広告が存在し、そこでは著者名が「ル・コルビュジエ・ソオニエ著」と記されている (佐々木, 2000, p. 156)。
- 9 参照したと記される独訳については、*Le Corbusier Kommende Baukunst* (Entwurf des Einbands von Richard Herre, Stuttgart, 1925) に加えて、追いかけるように翌年の1926年に刊行された同書の第2版にあたる *Le Corbusier Kommende Baukunst* (Deutsche Verlags Anstalt, Stuttgart Berlin und Leipzig, 1926) の可能性がある。独訳第2版の底本はル・コルビュジエによる「第2版への序」が含まれるほか、挿図に「アクロポリスの遠望スケッチ」が存在することから、仏語第2版である。独訳初版を確認できないため、宮崎がいずれを参照したかは不明であるが、独語第1版の可能性が高い。
- 10 吉阪訳の扉裏面には「Copyright© 1924 by Les Éditions G. Cres et Cie Published 1967 in Japan (ママ)」と記され、これを受けてだろうか、佐々木 (2005) も同翻訳の底本を「1924年のクレ社版」としている (p. 203)。しかし、1924

年の版ではありえない。底本は、1928年刊行の3版以降、おそらく1958年の復刻再版後の版と推定される。

- 11 邦訳普及版(2011)以降では、表紙に日本語の著者名と書名が合わせて印刷されるように変更された。
- 12 『建築へ』の論旨概要のページはV-X(V相当のページはページ付けなし)であり、仏語版のVII-XI(VII相当のページにはページ付なし)と若干相違している。

参考文献

- (1) Ducros, F.: “Amédée Ozenfant, ‘Purist Brother’: An Essay on His Contribution”, Eliel, C. S., *L’esprit Nouveau Purism in Paris, 1918–25*, Harry N. Abrams, Inc., 2001, pp. 71–99.
- (2) Jornod, N. et Jornod J.-P.: *Le Corbusier catalogue raisonné de l’œuvre peint Tome II*, Skira, 2005.
- (3) Lucan, J. (éd.): *Corbusier une encyclopédie*, Éditions du Centre Pompidou/CCI, Paris, 1987.
- (4) 伊藤勉: 「ル・コルビュジエ著『建築をめざして』初版本の謎について」, 『10 + 1』, No.11, 1987年11月, pp. 199–220.
- (5) 加藤道夫: 『総合芸術家 ル・コルビュジエの誕生 評論家・画家・建築家』, 丸善出版, 2012.
- (6) Le Corbusier-Saugnier: *Vers une architecture* (1^{ère} édition), Les Éditions G. Crès et Cie, 1923.
- (7) ル・コルビュジエーソーニエ(樋口清訳): 『建築へ』, 中央公論美術出版, 2003.
- (8) Le Corbusier: *Vers une architecture* (2^e édition), Les Éditions G. Crès et Cie, c. 1924.

- (9) Le Corbusier: *Le Corbusier Kommende Baukunst*, Deutsche Verlags Anstalt, Stuttgart Berlin und Leipzig, 1926.
- (10) ル・コルビュジエ(宮崎謙三訳): 『建築芸術へ』, 構成社, 1929.
- (11) Le Corbusier (Frederic Etchells Tr.): *Towards a New Architecture*, John Rodker Publisher, 1931.
- (12) ル・コルビュジエ(吉阪隆正訳): 『建築をめざして』, 鹿島出版会, 1967.
- (13) Le Corbusier: *Almanach d’architecture moderne*, Éditions Connivences, 1987 (original published, Les Éditions G. Crès et Cie, 1926).
- (14) 佐々木宏: 『巨匠への憧憬』, 相模書房, 2000.
- (15) 佐々木宏: 『知られざるル・コルビュジエを求めて』, 王国社, 2005.
- (16) 佐々木宏: 「ル・コルビュジエの活動の軌跡が分かる日本語版文献リスト」, 『ル・コルビュジエ 建築・家具・人間・旅の全記録』, エクスナレッジ, 2011, pp. 228–233.

追記

本資料の収集業務は、青山道乃に加えて、加藤道夫と寺内朋子が在任中に行われた。

(2023年5月9日原稿受理)

表1 『新精神』誌と *Vers une architecture* (初版) の対応

『新精神』誌での表題*	<i>Vers une architecture</i> (初版) での表題*	『新精神』誌における号	刊行年月	<i>Vers une architecture</i> (初版) での掲載順	備考
—	論旨概要 [ARGUMENT]	—			<i>Vers une architecture</i> (初版) で冒頭に追加
三つの呼びかけ 建築家諸氏に	三つの呼びかけ 建築家諸氏に I 立体	第1号	1920年10月	2	<i>Vers une architecture</i> (初版) では「立体」が表題に明記
三つの呼びかけ 建築家諸氏に 第2稿	三つの呼びかけ 建築家諸氏に II 面	第2号	1920年11月	3	<i>Vers une architecture</i> (初版) では「面」が表題に明記
三つの呼びかけ 建築家諸氏に 第3稿	三つの呼びかけ 建築家諸氏に III プラン	第4号	1921年1月	4	<i>Vers une architecture</i> (初版) では「プラン」が表題に明記
規整線(トラセ・レギュラツール)	同左	第5号	1921年2月	5	<i>Vers une architecture</i> (初版) において作品引用の注の主語が「LC-S」から「私」に変更
見えない目… 商船	見えない目… I 商船	第8号	1921年5月	6	『新精神』誌の表紙では「工学技師の美学」の項に記載
見えない目… II 飛行機	同左	第9号	1921年6月	7	同上
見えない目… III : 自動車	見えない目… III 自動車	第10号	記載なし	8	同上
工学技師の美学、建築	同左	第11–12合併号	1921年11月	1	『新精神』誌の表紙目次では「1920–21年のレビュー」の項に記載
量産住宅	同左	第13号	1921年12月	12	『新精神』誌の表紙目次で「工学技師の美学」の項に記載
建築 I ローマの教え	同左	第14号	1922年1月	9	同誌表紙目次で「美術」の項に記載
建築 II プランの幻覚	同左	第15号	1922年2月	10	同誌表紙目次で「建築」の項に記載
建築 III 精神の純粋な創造	同左	第16号	1922年5月	11	同上
—	建築か、革命か	なし		13	

*表題の邦訳は一部を除いて樋口清訳『建築へ』(2003)にならっている。

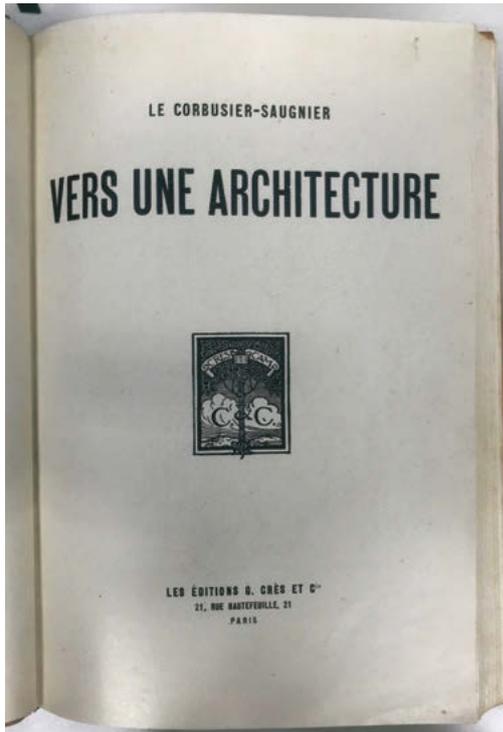


図1 中表紙 (著者名が LE CORBUSIER-SAUGNIER)



図2 アメデ・オザンファン [Amédée Ozenfant] への献辞

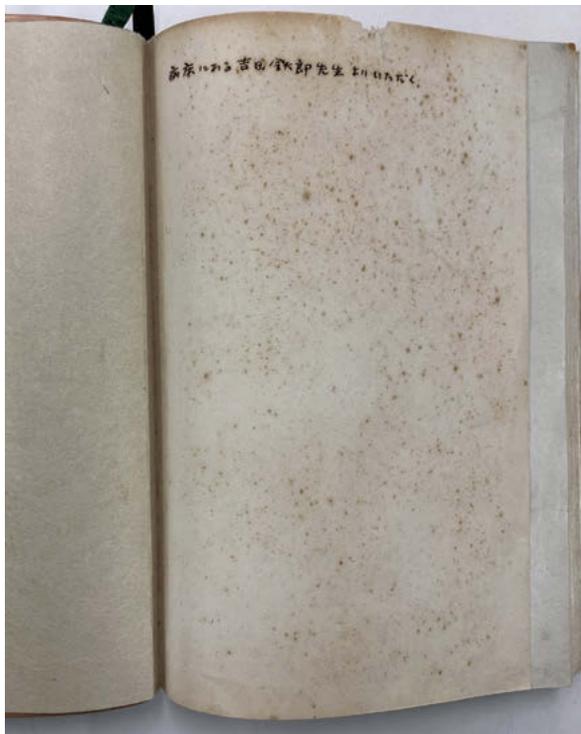


図3 樋口清による書き込み
「病床にある吉田鉄郎先生よりいただく」

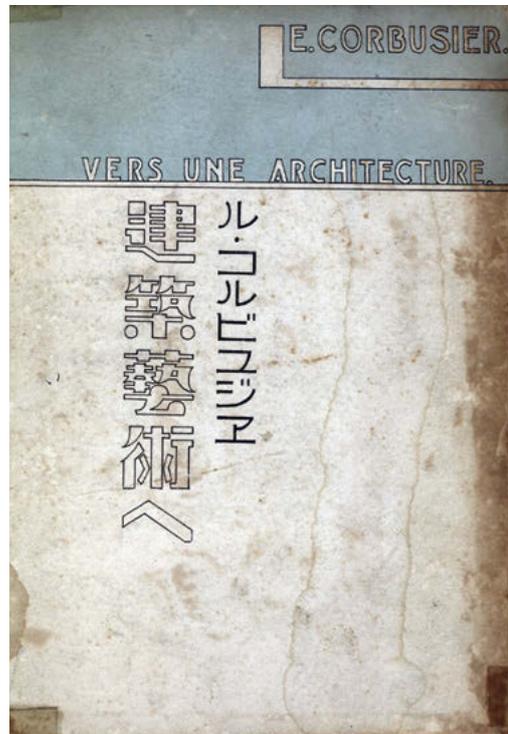


図4 宮崎謙三訳『建築芸術へ』(構成社、1929)、
函(個人蔵)